水玉パンツ

あげぱん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水玉パンツ

【Ｎコード】
Ｎ８６４４Ｉ

【作者名】
あげぱん

【あらすじ】
憧れの先輩
二葉涼介のいる高校に
入学した奈々
先輩を想い続ける日々
そんな
奈々のある日の話

出会い

「おっはよう！」
「おはよう。彩夏、どうしたの？朝からやけにテンション高いね」
突然、大声で挨拶してきたこの女の子は篠崎彩夏。
私の小学校からの親友で中学校も同じ。そして、高校も同じところを受験した。もちろん、彩夏と同じ高校がいいというのもあったが本当は中学の頃からのあこがれの先輩、二葉涼介がいるからだ。
先輩は陸上部で私はそのマネージャーをしている。
ちなみに彩夏も陸上部のマネージャーだ。
今もその関係はかわらず、ずっと平行線のままだ。

（はぁぁ。）

「どうしたの？元気なさそうだね。」

「そっ、そんなことないよぉ。それより彩夏、今日のテンションどうしたの？」
私は彩夏の異常なテンションのことを聞いた。

「実はね、私、昨日、二葉先輩に告白したんだぁ。」
「えぇ！　ほんとに？　結果はどうだったの？」

私の額から汗が吹き出し体に緊張が走った。

「ＯＫだったよぉ。勇気だして告白してよかったぁ。」
その言葉をきいた瞬間、体の力がすっとぬけたような気がした。
しかし、そのことを彩夏に悟られまいと意識はしっかりと保った。

「でね、今日はデートなんだぁ。この前オープンしたばかりのドルフィンランドに行くんだ。」

彩夏がうれしそうに言った。でも、私には全然聞こえてなかった。いや、むしろ聞きたくなかった。

…放課後

朝の彩夏の話をきいてから授業中も上の空だった。気がつけば帰りのＳＨＲも終わり、掃除が始まっていた。私は時計を見た。針は４時１５分をさしていた。本当ならこの時間には部活があるので私もマネージャーとして陸上部に顔をださなければいけない。だけど、今日は週に一回の部停の日だ。今頃、彩夏は二葉先輩と楽しくデートしているのだろう。そう思うと切なくて涙が出てきた。クラスの人にそのことを知られたくなかったので急いで教室を後にした。

げた箱までの廊下を走っていると急に何かにぶつかった。ぶつかった何かはがっしりしていて私は尻もちをついてしまった。

「大丈夫？ごめんね。怪我しなかった？」

涙をぬぐってその声の主の方へ目を向けるとそこには茶髪頭のイケメンが心配そうな顔をして私の顔を覗き込んでいた。

驚いた私は少し彼と距離を取った後こういった。

「大丈夫です。ありがとうございます。私の方こそすみません。」

「そっか。よかったぁ。でも、僕たち同じ2年生だからため口でいいよ。」

彼はそういうとまだ尻もちをついたままの私に手をさしだした。

「ほら、つかまって。そのままだとスカートよごれちゃうよ。」

私ははっとして今、自分がどんな状況なのかを思い出した。頬が紅潮していくのがわかった。気がつくと恥ずかしくなって黙ってその場から走り去っていた。

「あらら、もしかしてパンツ丸見えだったこと気にしてんのかな？俺はそんなこと気にしてないのに」

帰宅後

私は玄関で靴を脱ぎ捨てると二階にある自分の部屋へと駆け込んだ。しばらくベットに寝転がっていた。私の心臓はマラソンランナー並にリズミカルに鼓動していた。

（知らない人にパンツ見られちゃった。それも同級生？あぁ、最悪だよ～）

私がそんなことを考えていると下から妹の声がした

「お姉ちゃん、お客さんだよ。緑川高校の森山っていう人。」

「緑川高校って私と一緒の高校じゃない。でも、森山ってだれ？」

少なくとも私の交友関係に森山という人物は数えるほどしかいなかった。

「もしかしてその子メガネかけてる？」

「ううん。それに男の子だよ。結構、イケメンだったよ。もしかしてお姉ちゃんの彼氏？」

そういいながら妹はからかうような笑顔で親指をたてて聞いた。

「違うよ。そんな人知らないし。」

「まあ、あってみればいいじゃん。お姉ちゃんが忘れてるだけかもしれないよ」

「うん。」

私はそう答えてその人物にあってみることにした。階段をおりて玄関のほうをみるとそこに待っていたのはさっきぶつかったあの人だった。

「やあ、さっきはいきなりどっか行っちゃうから焦ったよ。はい、これさっきおとしたみたいだったから。」

そういうと彼は鞄から一冊のノートを取り出した。それは明日までにレポートをまとめて提出しなければいけない物理のノートだった。

「ありがとう。あやうく欠点になるところだった。本当ありがとう。さっきはごめんね。いきなり逃げて。」

私はそう言ってノートを受け取った。

「俺、４組の森山涼。音楽部と生徒会執行部やってまーす。よろしく！」

そして、彼は握手を求めてきた。

「私は3組の綾瀬奈々。陸上部のマネージャーやってます。よろしくお願いします。」

私たちはお互いに手を取り合って握手をした。その時、彼がいった。

「じゃあ、そろそろ帰るわ。また明日学校でな。あっ、さっきは水色の水玉パンツ見せてくれてありがとう。可愛かったぜ。じゃあな。」

私は自分の顔が赤くなるのがわかった。なにか言おうと思った時には彼はもう玄関をでて帰っていた。これが私の新たな恋の始まりだった。

（って私、心変わり早っ！さっきはじまったばかりなのに……
女心は秋の空とは
よくいったものですね。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8644i/

水玉パンツ

2010年10月14日15時41分発行